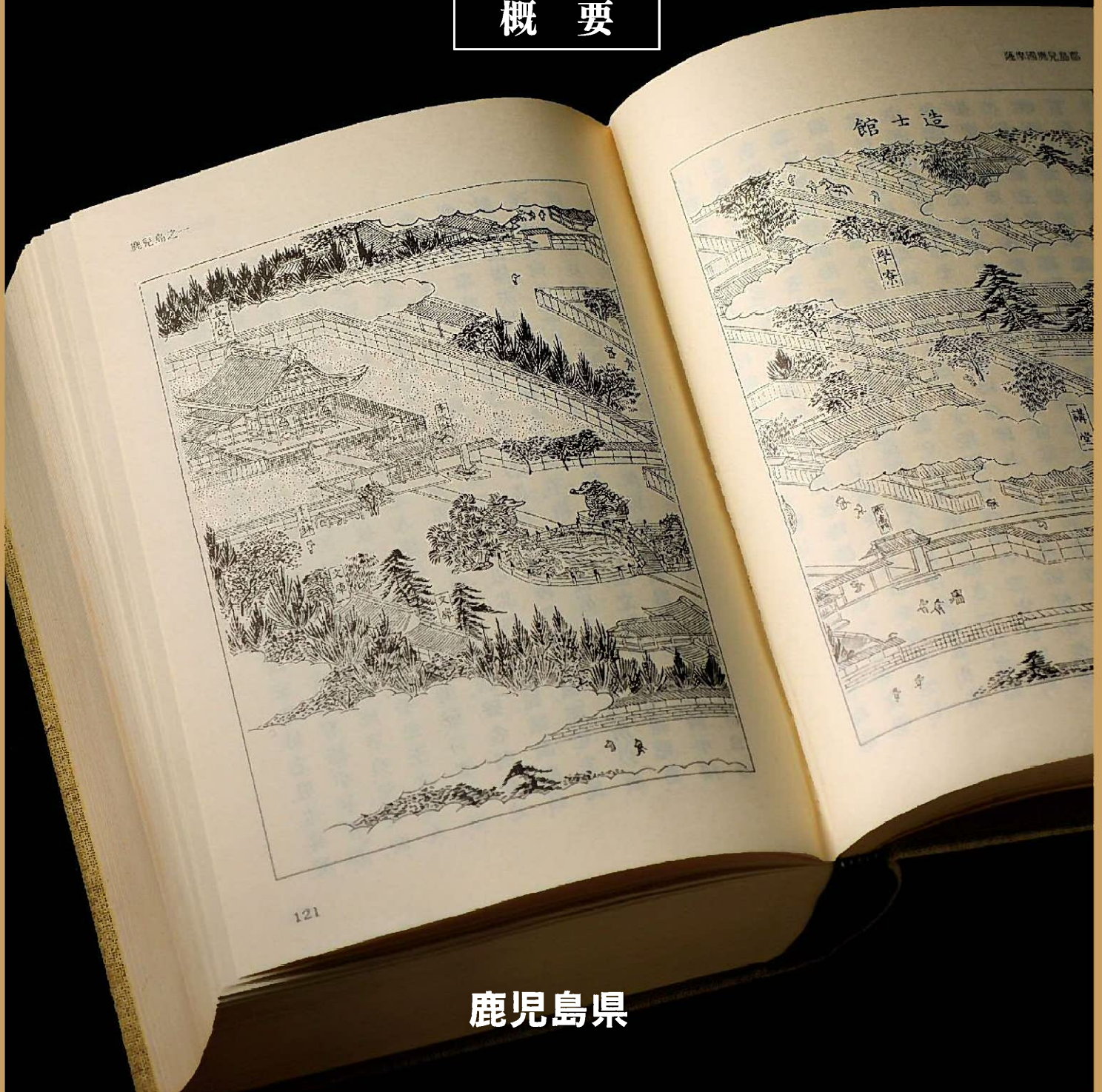


明治維新150周年記念事業

明治維新と 郷土の人々

概要



鹿兒島県

明治維新と郷土の人々

平成30年に明治維新150周年の節目の年を迎えるに当たり、明治維新という時代の大きな変革期における郷土の先人たちの志や偉業を見直し、我々鹿児島県人が今後進むべき方向性を改めて考える契機とするため、専門家からの助言もいただきながら調査等を実施し、『明治維新と郷土の人々』として取りまとめました。

本誌は、その概要を分かりやすくまとめたものです。本誌を通して、薩摩藩が明治維新に大きな役割を果たすことができたのはなぜか、郷土の人々にとって明治維新とは何だったのか、ということなどを考えてみましょう。

I 明治維新と武士 3ページ～

薩摩藩が明治維新で重要な役割を果たすことができた要因として、学問のレベルの高さ、幕府や朝廷との関係、琉球等を通じた海外情勢の把握、財政改革、家老や郷土の役割などが挙げられます。

また、藩主や家老による情報の共有や、能力に応じた人材登用などにより、藩が一つにまとまって行動できる体制を築きました。

- 1 薩摩藩の学問
- 2 薩摩藩の組織体制と人材登用
- 3 薩摩藩のネットワーク

トピックス

調所広郷による天保の改革
島津斉彬の集成館事業
西南戦争とその影響
明治期の人物



「島津斉彬公御取立騎兵操練図絵巻」【尚古集成館保管】
(しまづなりあきらこうおとりたてきへいそうれんずえまき)
安政5年(1858)、島津斉彬立ち会いの下、天保山(てんぼざん)で実施された騎兵隊による軍事演習の様子を描いた絵巻



「薩州鹿児島見取図」【武雄鍋島家資料・武雄市蔵】
(さつしゅうかごしまみとりえず)
安政4年(1857)、薩摩藩の視察に訪れた佐賀藩士 千住大之助(せんじゅだいのすけ)が描いた集成館の絵図

II 明治維新と市井の人々(庶民) 9ページ～

庶民は、厳しい生活の中でもたくましく生き抜き、彼らが納めた年貢等が藩の財政を支え、明治維新での薩摩藩の活躍につながりました。

琉球・奄美と本土を結ぶ海運を担った商人は、藩に多額の献金を行い、また、集成館事業などに携わった技術者たちは、我が国の産業の近代化に大きく貢献しました。

- 1 幕末期の庶民の暮らし
- 2 明治維新後の庶民の暮らし
- 3 奄美・琉球と商人



明治維新と薩摩藩

日本の西南の端に位置し、早くから西洋列強の外圧にさらされた薩摩藩は、日本の独立を守るため、全国に先駆けて西洋式の製鉄、製砲、造船、紡績等に取り組み、産業の近代化を図りました(集成館事業)。

薩摩藩は、生麦事件や薩英戦争などを経験しながらも、朝廷と幕府の協力の下、日本を一つにまとめて外国の勢力に対抗しようとした(公武合体策)。始めから倒幕を目的としていたのではなく、世界の情勢を捉えた新たな国家建設を目指していたのです。

しかし、15代将軍 徳川慶喜は、大政奉還後も新しい政府内でこれまでどおり主導権を握ろうとしました。そこで、旧幕府勢力を除いた形で天皇中心の新国家を建設するため、薩長土肥を中心とする官軍は戊辰戦争で旧勢力を降し、国内を平定しました。

明治新政府は、政治・経済・社会など様々な改革を行い、近代日本の基礎を築いていきました。その過程においても、多くの薩摩藩出身者が様々な分野で重要な役割を果たしました。

III 明治維新と女性 11ページ～

武家の女性は、夫を支え家庭を守るとともに、子どもを立派に育てることに全力を注ぎました。

農村の女性は、男性とともに農作業に励み暮らしを支えました。

女性の教育は、幕末までは実践を中心とした家庭での躰が中心でしたが、明治維新後は徐々に学校教育も充実していきました。

- 1 武家の女性
- 2 農村の女性
- 3 女性の教育



「琉球眞景(りゅうきゅうとうしんけい)」【名護博物館蔵】

京都四条派(しじょうは)の画家 岡本豊彦(おかもととよひこ)が、19世紀前半の奄美の様子を全11景で描いた絵巻



造士館(ぞうしかん)図『三国名勝図会(さんごくめいしょうずえ)』(青潮社)
江戸時代後期の藩主 島津斉興(しまづなりおき)が五代秀堯(ごたいひでたか)から命じて作らせた、薩摩・大隅・日向の地誌

IV 明治維新と子ども 13ページ～

薩摩藩では、郷中教育を行っていたことが特色として挙げられます。志のある優秀な者は、藩校 造士館での教育、さらには江戸・大坂・長崎などで高いレベルの学問を学ぶことができました。また、幕末には開成所の設置や英国留学生の派遣など、海外に目を向けた人材育成を行いました。

江戸時代の庶民の子どもは、家の職業に関することを親や地域の先輩から学びました。

明治維新後は学校教育が始まり、西南戦争後に本格化しました。

- 1 海外に目を向けた人材の育成
- 2 藩校での教育
- 3 郷中教育
- 4 明治維新前の庶民の教育
- 5 明治維新後の教育



I 明治維新と武士

薩摩藩が明治維新で重要な役割を果たすことができた要因の一つに、学問のレベルが高かったことが挙げられます。儒学や国学を通して高い志や忠誠心が身に付き、公のために命がけで行動するようになりました。

また、薩摩藩では藩主や家老が情報や考え方を共有したり、能力に応じて下級武士も積極的に登用したりすることで、藩が一つにまとまって行動できる体制をとっていました。

薩摩藩は、幕府や朝廷とのネットワークを最大限に活用しており、藩の方針を決める際には、独自のルートで入手した海外の情報も大いに参考にしました。



1 薩摩藩の学問

Q 薩摩藩(の武士たち)が明治維新で取った行動には、どのような学問的背景があったのでしょうか?

儒学と国学

薩摩の地では、戦国時代に桂庵玄樹が儒学を広め、江戸時代の初めには南浦文之や泊如竹などの優れた学者が出て、林羅山など幕府の学者もこれを参考にするほどでした。江戸時代中期には、8代藩主島津重豪によって藩校 造士館(→P.13)が設置され、薩摩藩の武士たちはここで朱子学を中心とする儒学を学びました。

薩摩の学問の特徴の一つは、理論よりも実践を大事にするということでした。したがって、儒学の中で特に実践を重んじる陽明学も盛んで、西郷隆盛や大久保利通らも学んでいました。

このような学問を背景に、薩摩藩の武士たちは、自ら行動していく志や、公のために身を捧げるといった考え方を身に付けていきました。

また、江戸時代の後期には、日本固有の精神や文化を明らかにする国学も盛んになり、これは天皇を敬う尊王思想と結びつくようになりました。薩摩藩でも藩主や家臣たちが国学を学んでおり、全国の国学者とのネットワークを通じて得られた情報は、藩の方針を決める際に重視され、明治維新における薩摩藩の活動に大きな影響を与えました。

いにしへの道を聞きても唱へても
わが行ひにせずばかりなし
古くからの立派な教えを聞いたり唱えたりするだけ
ではなく、自分で実践しなければ何にもならない。

※日新公(じつしんこう)というは歌

※戦国時代の武将 島津忠良(日新公)が作った47首のいろは歌で、薩摩藩の政治や教育の基本とされました。

蘭学と英学

島津重豪は、西洋の文化や学問に強い興味・関心を示し、自らも蘭学(オランダ語とそれを通して学ぶ西洋の学問)を学んでおり、オランダ商館の医師シーボルトと面会した際にはオランダ語で会話をしたという記録が残っています。

重豪のひ孫である11代藩主 島津斉彬も、多くの蘭学者と親交があり、蒸気機関に関するオランダ語の専門書を翻訳させています。その人脈や研究の成果は、産業の近代化を進めた集成館事業(→P.7)で活用されました。

西洋ではオランダに代わりイギリスが中心になってきており、そのことをいち早く見抜いた薩摩藩は、薩英戦争後に設置した西洋の語学や技術を教える開成所でも、蘭学から英学を中心とした教育に転換しました。さらに、慶応元年(1865)には直接イギリスで学ばせるため、19人からなる薩摩藩英国留学生(使節団)(→P.13)を派遣しました。



島津重豪(しまづしげひで)
(1745-1833)
【玉里島津家資料・黎明館蔵】



島津斉彬(しまづなりあきら)
(1809-1858)【尚古集成館蔵】



西郷隆盛(さいごうたかもり)
(1827-1877)【黎明館蔵】

- 学問のレベルが高く、高い志や公のために身を捧げるといった考え方を持っていた。
- 家柄に関係なく優秀な人材を積極的に登用し、藩が一つにまとまって行動できる体制をとった。
- 藩の人口の約25%が武士であり、戦争などの緊急時にはすぐに対応が可能であった。
- 琉球などを通じて海外の情報を得ており、早くから西洋列強への危機感を感じていた。
- 幕府を倒すことが目的ではなく、日本が一つにまとまり新たな国家を作る必要性を感じていた。
- 調所広郷による天保の改革で藩財政を強化し、明治維新に向けた財政的基盤を整えていた。
- 島津斉彬の集成館事業をはじめ、いち早く近代化を推進していた。

2 薩摩藩の組織体制と人材登用

Q 西郷隆盛や大久保利通といった下級武士が、明治維新で活躍できたのはなぜでしょうか？

人材登用

江戸時代は、原則として家柄に応じて就任できる役職が決まっていた。しかし、薩摩藩では、家柄に関係なく優秀な人材が重要な役職に抜擢されることもあり、島津重豪は調所広郷を抜擢して財政改革(天保の改革)(→P.7)を担当させ、島津斉彬も下級武士の西郷隆盛を登用しました。

斉彬の死後、薩摩藩を率いることになった島津久光も、西郷や大久保利通ら下級武士を中心に結成された誠忠組から優秀な者を登用して、藩が一つにまとまって行動できる体制を作っていました。

組織体制

12代藩主 島津忠義とその実父である久光は、「開国」「尊王」「公武合体」という斉彬の遺志を引き継ぐことを前面に出しながら、藩をまとめていこうとしました。新たに小松帯刀らを家老に任命し、その下に大久保利通など優秀な下級武士を登用して政治を進めました。

久光は、文久2年(1862)に幕府の政治を改革するため江戸に向かう際、藩の方針に反する行動を取る者を厳しく処罰しました(寺田屋事件)。また、生麦事件(→P.6)をきっかけとして起こった薩英戦争において、藩士たちを警備や戦闘に動員するを通して藩の権力を完全に掌握しました。

その結果、薩摩藩は藩を分裂させることなく、明治維新において大きな役割を果たすことができました。



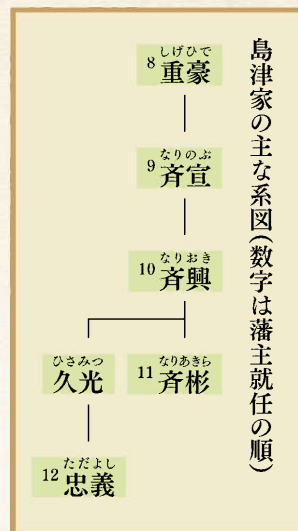
小松帯刀(こまつたてわき)
(1835-1870)
【尚古集成館蔵】



大久保利通(おおくぼとしみち)
(1830-1878)
【国立歴史民俗博物館蔵】



島津久光(しまづひさみつ)
(1817-1887)【玉里島津家資料・黎明館蔵】



家老の役割

幕末の薩摩藩では、藩主 島津忠義と久光親子の下に、小松帯刀、桂久武、新納久脩、岩下方平など優秀な家老があり、開成所の設置、英国留学生(使節団)の派遣、パリ万博への出展などの諸政策も、藩の中心となる人々の間で情報や考え方が共有されていました。

薩摩藩と長州藩が手を結んだ慶応2年(1866)の薩長同盟も、薩摩藩側は西郷隆盛だけではなく、家老である小松帯刀がいたからこそ成立したのです。

郷士の役割

薩摩藩の特徴の一つは、他藩に比べ非常に多くの武士がいたことです。その多くは領内113か所に分けられていた郷(外城)に住んでおり、郷士と呼ばれました。彼らは、普段は農業をしながら武芸の訓練もしており、幕末には各郷で鉄砲を用いた軍事訓練も行っていました。

いざ戦争となった際には郷単位で部隊を編成できたことが、戊辰戦争の時に大きな力となって現れました。

3 薩摩藩のネットワーク

薩摩藩は、日本の西南の端に位置し、江戸や京都など政治の中心地から遠く離れていました。しかし、藩主の島津家は徳川家や京都の公家である近衛家と婚姻関係で結ばれており、その関係やそこから得られる情報などは薩摩藩にとって非常に重要でした。

また、西洋列強の動きについては、琉球を通じて独自に把握していたほか、長崎や横浜から海外情報入手するルートも持っていました。さらには、薩摩藩英国留学生(使節団)やパリ万国博使節団からも直接ヨーロッパの情報が送られてきており、西洋列強の軍事力・技術力が日本より遙かに優れていることや、日本をどのように見ているかということを確認して把握していました。

薩摩藩は、こうした海外の情報も踏まえ、西洋列強による植民地化を防ぐためには、日本が一つにまとまり近代化を図ることが必要だと認識しました。

幕府・朝廷との関係

Q 薩摩藩と幕府・朝廷との関係はどのようなものだったのでしょうか？

幕府との関係

江戸時代中期以降、島津家は徳川家と一番の親戚であり、最も影響力のある大名でした。

薩摩藩は、幕府を倒すことが当初からの目的だったわけではなく、新しい国を作る必要性を実感していたため、最終的には幕府を倒す勢力の中心となりました。

朝廷との関係

薩摩藩と朝廷を結ぶ最も大きなパイプは、摂政や関白などを務める有力な公家である近衛家でした。薩摩藩が近衛家を通じて得た朝廷や公家に関する情報は、質・量ともに他藩や幕府を上回っていました。

薩摩出身の2人の御台所(将軍の正室)



篤姫(あつひめ)(1836-1883)
【尚古集成館蔵】

11代将軍 徳川家斉の正室となった茂姫と13代将軍 徳川家定の正室となった篤姫は島津家から嫁ぎました。

また、2人とも近衛家の養女として嫁入りを行っており、ここにも島津家と近衛家の深い関係がうかがえます。

幕末期における外国船の来航の状況



海外情報の把握

琉球、長崎、横浜、そして海外からの情報は、薩摩藩の方向性を決める際に極めて重要な意味を持ちました。

琉球

江戸時代後期には、西洋列強の船が琉球にたびたび来航し、開国・通商を迫っていました。

間接的に琉球を支配していた薩摩藩は、領土の危機を感じ、日本の独立を守るためには、西洋を排斥する攘夷ではなく、国が一つにまとまり近代化を図っていく必要があるということを一早く認識しました。

Q 幕末の薩摩藩は、西洋列強とどのように関わっていったのでしょうか？

偶発的に起きた生麦事件

文久2年(1862)に武蔵国生麦村(現在の横浜市鶴見区生麦)付近において、薩摩藩主 島津忠義の父である久光の行列を乱した騎馬のイギリス人を、護衛していた藩士が殺傷する事件が起こり、1人が死亡し、2人が重傷を負いました。

これは、日本の慣習を知らないイギリス人との間にたまたま起きた事件でしたが、この事件の賠償責任をめぐる、翌年には薩英戦争が起こりました。

西洋の実力を知った薩英戦争

薩摩に艦隊を派遣したイギリスは、薩摩藩との交渉を有利にするため、3隻の蒸気船を捕らえましたが、薩摩藩はこれをイギリス側が攻撃を仕掛けたと判断し、砲撃を開始しました。イギリス側は戦争が始まることを想定しておらず、当初は大きな被害を受けましたが、戦闘の準備が整うと反撃を開始し、薩摩藩の砲台は次々に破壊され、鹿児島城下も上町を中心に焼失しました。

この戦いでイギリス側は薩摩藩の実力を知り、また、薩摩藩も近代工業に裏付けられたイギリスの技術の高さを痛感しました。このように、相手を互いに評価したことが、その後の薩摩藩英国留学生(使節団)の派遣(→P.13)や、イギリス公使 パークスの鹿児島訪問などに見られるような鹿児島とイギリスとの提携につながっていきました。



「薩英戦争絵巻」【黎明館蔵】

パリ万国博覧会への出展

薩摩藩は、慶応3年(1867)の第2回パリ万国博覧会に「薩摩太守政府」として出展し、幕府とは対等で独立した国家であることをアピールしました。これにより幕府の権威は失われ、予定していたフランスからの借款(資金借入)計画も白紙に戻されました。

薩摩藩の出展は、薩摩藩英国留学生(使節団)の新納久脩と五代友厚がフランスのモンブラン伯爵と計画したもので、幕府に先駆けて万博開催の情報を入手し、準備を進めていました。

薩摩藩の代理人となったモンブラン伯爵は、「薩摩琉球国勲章」の作成や、マスコミを使った情報戦術で薩摩藩の存在を大いに宣伝しました。



新納久脩(にいろひさのぶ)
(1832-1889)【黎明館蔵】



「薩摩琉球国勲章」
(さつまりゅうきゅうこくくんしょう)
【尚古集成館蔵】

Q 薩摩藩は、海外情報をどのように収集していたのでしょうか？

長崎

長崎開港などの役人を長崎に常駐させ、情報収集を行っていました。彼らは、日頃から中国語やオランダ語の通訳などに経済的な支援をすることで、中国やオランダからの海外情報をスムーズに得ることができました。

例えば、ペリー艦隊が日本に来航するという情報も、他藩に先駆けて入手しています。

横浜

西洋諸国等の情報を収集するため薩摩藩に雇われた南部弥八郎は、横浜の居留地で発行されている英字新聞の翻訳を入手したり、幕府の洋書調所の学者などから西洋諸国等の動向をはじめとする情報を精力的に収集したりして、薩摩藩に報告しました。

海外

薩摩藩英国留学生(使節団)の団長 新納久脩や留学生の監督 町田久成は、現地の新聞の翻訳などを基にしてヨーロッパの情勢についても藩に報告しています。

五代友厚の手紙には「近代国家にとって工業と貿易は最も大事である」と書かれています。

イギリスからの軍事支援と西郷隆盛

西郷隆盛は、戊辰戦争が始まる半年前の慶応3年(1867)7月にイギリス領事館書記のアーネスト・サトウと会いましたが、この際に「もし薩摩藩と幕府が戦争になった場合には、イギリスが薩摩藩の軍事支援をしてもよい」というサトウの申し出を断りました。

これは、アジアを植民地にする際には軍事支援から始めることが西洋列強のやり方であるということを、英国留学生等から送られてきた情報で知っていたためでした。

調所広郷による天保の改革

財政難に苦しんでいた薩摩藩は、調所広郷の天保の改革によって500万両の負債の整理と50万両の備蓄に成功しました。

調所広郷(ずしよひろさと)
(1776-1848)
【西村貞則氏蔵 黎明館保蔵】



改革の主なポイント

● 借金の返済期間の延長

薩摩藩の負債500万両を、利子なしの返済で、さらに250年の分割払いとしました。この支払いは明治4年(1871)の廃藩置県まで続けられました。



● 殖産興業

薩摩焼の生産を奨励したり、農業生産向上のため百姓に肥料を安い価格で販売したりしました。



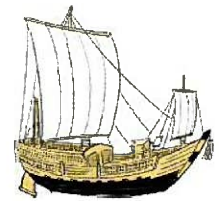
● 専売制の実施

特産品である奄美の黒糖を藩が独占的に売買する専売制を実施しました。黒糖による収益は、専売制実施前は11年間で136万両でしたが、実施後には10年間で235万両に増加しました。その他口ウソクの原料となる蘆蠟なども専売制を実施しました。



● 商業資本の活用

協力的な商人に対して専売品を優先して扱わせ利益を上げさせました。また、藩内の商人に資金を貸し付けて船を建造させ、藩の産物を運搬させました。



このほか、人々の生活の安定のため、甲突川の改修や、川内川の上流にあたる首木川の開削なども行いました。

調所広郷の天保の改革により、大坂を中心とする上方との通商は拡大し、薩摩藩の財政基盤は強化され、明治維新の原動力となりました。一方、奄美の人々など百姓の多くは苦しい生活を強いられました。

島津斉彬の集成館事業

島津斉彬は近代化政策を展開し、当時日本最大規模の工場群を磯地区を中心に建設しました。(集成館事業)

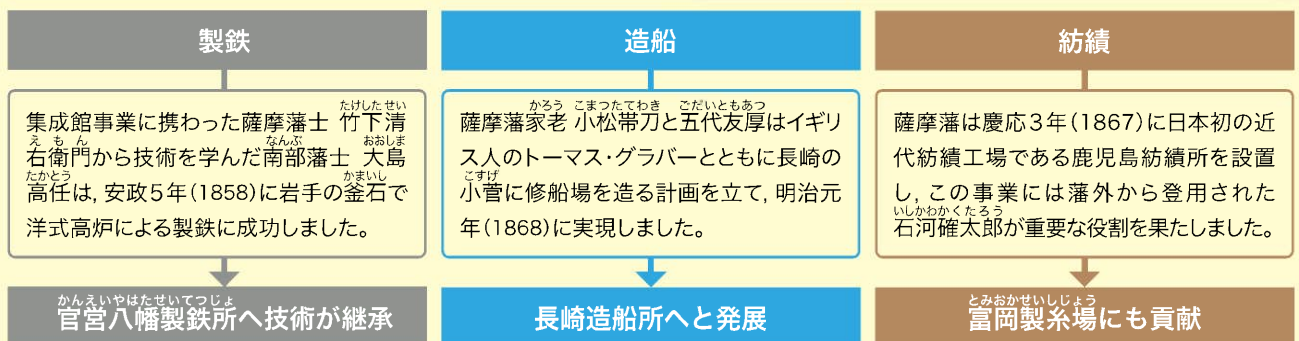
この事業では、これまでの技術を応用しながら西洋の近代的な技術を導入して、製鉄、製砲、造船、紡績など様々な産業が興されました。また、近代化に必要な知識や技術を持った人材を藩内外から広く集めるとともに、例えば反射炉建造に当たっては、朝鮮由来の薩摩焼の技術による耐火レンガや、中国由来の石工の技術による石組みなど、薩摩に蓄積されたこれまでの技術が応用されました。



反射炉(はんしゃる)跡(鹿児島市磯地区 仙巖園内)

「明治日本の産業革命遺産 製鉄・製鋼、造船、石炭産業」
として平成27年(2015)に世界文化遺産に登録
【鹿児島市の構成資産:旧集成館、寺山炭窯跡、関吉の疎水溝】

集成館事業から日本の近代化へ



西南戦争とその影響

鹿児島城下の士族(江戸時代の武士)は、生活に必要な収入を藩や政府から支給される秩禄(給料)に頼っていたため、明治政府が実施した秩禄処分(給料の見直し)による経済的な影響が大きく、その不満も西南戦争の背景となりました。それに対し、地方の士族は自らの開墾地を持っており、そこから得られる収入もあったため、城下の士族に比べれば秩禄処分による経済的な影響は少なかったといえます。

西南戦争

西郷隆盛は、明治4年(1871)に廃藩置県を行うなど明治政府で重要な役割を果たしていましたが、朝鮮への使節派遣を巡る明治六年の政変に敗れて鹿児島に戻り、私学校を設立し若者の教育などに当たりました。

しかし、政府の政策に不満を持っていた士族たちは、明治10年に西郷隆盛を中心にして西南戦争を起こしました。西南戦争は西郷が率先して行ったものではありませんでしたが、戊辰戦争を武士の力で乗り切ったという思いもあり、西郷は彼らを切り捨てることができませんでした。

西南戦争に従軍した士族の中には、戦争の目的を理解しないまま出陣した者もいました。西郷隆盛への敬愛の念からの他に、地域の指導者や私学校幹部による強制的な徴用もありました。

西郷軍には九州各地から多くの士族が加わり、熊本城などをめぐる激しい戦いが繰り広げられましたが、最後には官軍によって鎮圧され、西郷は鹿児島市の城山で自刃しました。



西南戦争錦絵(出陣の図)【国立国会図書館蔵】

西南戦争と庶民

西南戦争は士族による戦争でしたが、庶民も協力させられ、多くの命が失われました。生還しても、生涯戦傷が残るなど、庶民の暮らしにも大きな影響を及ぼしました。

鹿児島市街地は、官軍が占領した5月以降しばしば戦火に見舞われ、大半が焼失しました。戦後は、政府から住宅再建のため資金の貸し付けが行われ、約半年で焼失家屋の約1/3が再建されました。

鹿児島では、明治維新後の本格的な変化(地租改正など)は西南戦争後に起こりました。

明治期の人物

明治政府では政治、軍事、外交など多くの分野で薩摩藩出身者が活躍しました。また、民間でも産業の発展などに尽力した人々がいました。

大阪の恩人 五代友厚

五代友厚は幼少から才能を評価され、幕末期には薩摩藩英国留学生を率いてイギリスに渡航し、軍艦や紡績機械の購入に当たりました。

明治維新後は、造幣寮(現在の大阪造幣局)や大阪商会議所(現在の大阪商工会議所)、大阪商業講習所(現在の大阪市立大学)等の設立に携わるなど、大阪の商業発展に尽力した人物として高く評価されています。



五代友厚(ごだいともあつ)
(1835-1885)【黎明館蔵】

地方産業の発展に 尽力した前田正名

前田正名は、16歳から長崎の英語塾で学んだ後、西洋への留学資金を得るため上海に渡り、『薩摩辞書』と呼ばれる英和辞典を作成・発行しました。

明治2年(1869)から7年間フランスで農学などを学び、帰国後は農商務省で地方の産業を振興する政策を進め、次官を務めましたが、富国強兵を急ぐ政府の考えに合わず辞職しました。その後も、全国を遊説しながら、農業を中心とした地方産業の発展に生涯を捧げました。



前田正名(まえだまさな)
(1850-1921)
【国立歴史民俗博物館蔵】

II 明治維新と市井の人々(庶民)

江戸時代後期の薩摩藩では、百姓が納める年貢は「八公二民^{はちこうにみん}」(収穫の8割を納入)と呼ばれるほどの高率になり、百姓の生活は非常に厳しいものでした。そうした中でも、信仰や芸能などを心の支えとして力強く生き抜きました。

また、南九州は古くから奄美や琉球、中国と海上交通路で結ばれ、藩内の海商(船を所有する商人)は藩から保護を受ける見返りに多額の献金をして、藩財政の強化に貢献し、明治維新の原動力となりました。



1 幕末期の庶民の暮らし

Q 幕末維新期の庶民は、どのような生活をしていましたでしょうか？

城下の暮らし

文政9年(1826)における鹿児島城下の人口は、武士16,794人に対し町人4,941人で、武士が77%を占めました。城下は上町、下町、西田町の3つに分けられ、町奉行の支配の下、各町に会所が置かれ、町人から町年寄(責任者)が任命されました。

農村の暮らし

薩摩藩では、百姓を5戸程度で組織する門ごとに年貢や夫役(労働奉仕)を課す門割制度や、人配(人数が多い地域から少ない地域への強制移住)などの藩特有の制度もあり、一般に百姓は苦しい生活だったと言われています。

薩摩藩領の多くはシラス台地で稲作に不向きでしたが、気候が温暖で農作物が育ちやすい環境であることや、1700年前後に琉球から伝わったさつまいもが人々の生活を支えていました。

野町・浦町の暮らし

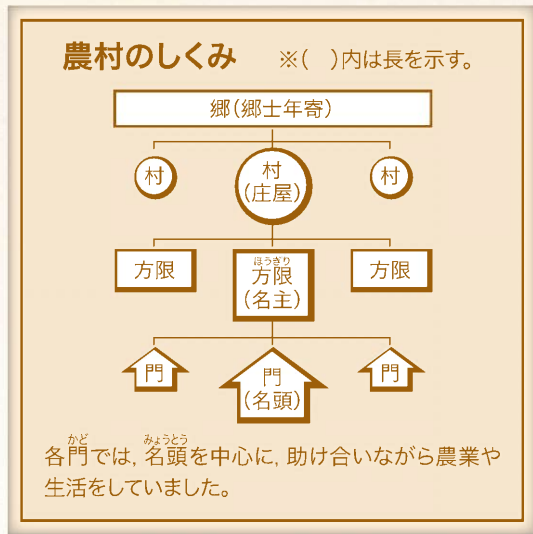
薩摩藩の郷村は、郷士が住む麓を中心に、それに隣接して町人の住む野町(商業地域)、その周りに在(農村)が広がっていました。船着きが便利な海岸には、漁師の住む浦(漁村)や浦町がありました。

郷士や百姓は、野町で必要な品物を買いましたが、当時は自給自足が基本で買う品物は限られていたため、ほとんどの野町は小規模でした。



六月灯^{しづみづつき}は、2代藩主 島津光久^{しまづみつひさ}が、城下の新照院に観音堂を建立した際、灯笼^{とうろう}を寄進したことに始まるとされています。これに倣^{なら}って町人も地域の寺社に灯笼を寄進するようになり、広まっていきました。

※旧暦6月の夜、各寺社が日を決めて信者が寄進した灯笼を灯す夏祭り。



『南島雑話』(なんとうざつわ)
【奄美市立奄美博物館蔵】
奄美の人々にとって、
厳しい生活の中でも
闘牛は最大の娯楽で
した。

奄美の暮らし

奄美には薩摩藩の役人が数年交代で派遣されました。しかし、実際の統治は数人の藩の役人では充分に行うことができないため、島内の有力者である与人など島役人の協力を得て行われました。

薩摩藩は調所広郷による天保の改革で、奄美の特産品である黒糖の専売制(→P.7)を実施し、巨額の借金を返済しましたが、その一方で、奄美の人々は藩が決めた安い値段で黒糖を売らなければならないなど、厳しい生活を強いられました。

ポイント

- 重い年貢を納めることで藩財政を支えた。
- 百姓の暮らしは厳しかったが、信仰や芸能などを心のよりどころとして力強く生きた。
- 南九州には海商かいしやうがあり、奄美・琉球りゅうきゅうや大坂との海上輸送で活躍し、利益を上げた。

2 明治維新後の庶民の暮らし

明治維新により政治面は大きく変化しましたが、鹿児島では社会の変化はなかなか進みませんでした。明治10年(1877)の西南戦争(→P.8)は庶民の暮らしにも大きな影響を及ぼしました。地租改正など本格的な社会の変化が始まったのは、西南戦争後のことでした。

県外から見た明治の鹿児島

明治22年(1889)に鹿児島県の教員になった新潟県出身の本富安四郎ほんふやすしろうは、『薩摩見聞記』に鹿児島では未だに士族の力が強く、議員や公務員などの公職を士族が占めていると記しています。

3 奄美・琉球と商人

Q 商人たちは、どのような形で明治維新に貢献したのでしょうか？

南九州は古来、奄美・琉球りゅうきゅう・中国と海上交通路で結ばれており、江戸時代の初めまで、山川・坊津ぼうづ・加世田かよだ・阿久根あくね・内之浦うちうら・志布志しぶしなどは外国船も訪れる港町でした。これらの港には海商かいしやうがあり、江戸時代には奄美・琉球や大坂を結ぶ海上輸送で活躍しました。

藩は、藩内外の商人に蝦夷地えぞち(現在の北海道)などの昆布を琉球に運ばせ、その一方で黒糖や琉球が中国から輸入した漢方薬等を長崎や大坂等で販売し、大きな利益を上げました。商人は藩から保護を受ける見返りに多額の献金をして、藩財政に貢献しました。

長者番付を飾った薩摩の海商

文化14年(1817)に作られた「三津分限帳 諸国大福帳」(全国長者番付さんしんぶんげんちやう)には、大関おおいづみに指宿さしゆじの湊みなと太左衛門たさゑもん(浜崎太平次はまさきたへいじ)、関脇せきわしに高山たかやまの波見なみ(重政じゆうせい)政右衛門せいゑもん、前頭まへづとに鹿児島かぎしやうの長崎武右衛門ながさきぶゑもんや重野新左衛門じゆうのしんざゑもんなどの海商の名前が見えます。

※ 江戸時代には、いろいろな事柄を相撲の番付に見立ててランク付けすることが流行しました。

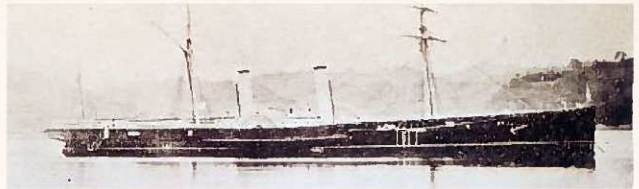


「三津分限帳 諸国大福帳」【国文学研究資料館蔵】

指宿の海商 浜崎太平次

浜崎太平次はまさきたへいじ(8代)は、藩や琉球の産物を江戸・大坂・長崎に運び巨利を得ました。そして那覇なは・長崎ながさき・大坂おおさか・箱館はこだて等に支店を置き商圏を全国に拡大しました。

10代太平次も、薩摩藩が海外からの洋式銃購入の際に2万両、春日丸購入の際に代金16万両のうち頭金8万両を献金するなど、藩財政に貢献しました。また、薩摩藩英国留学生(→P.13)の派遣費用も提供したと言われています。



軍艦 春日丸(『薩摩海軍史 下巻』)

慶応3年(1867)に薩摩藩が長崎でイギリスから購入し、戊辰(ぼしん)戦争では兵士や武器の輸送に活躍しました。

山形屋のはじまり

薩摩藩は、もともと藩外の者の入国を制限していたため、商業活動は自由にできませんでした。島津重豪しまつしげひでは鹿児島城下の商業の発展のため、藩外の商人を招きました。

大坂で紅花べにばな(染料の原料)仲買や呉服なかがい こぶく(絹織物)・太物ふともの(綿織物)の商売をしていた山形出身の山形屋源衛門やまがたやは、重豪のこの政策を知り、安永元年(1772)、鹿児島に移住して商売を始めました。

これが現在の鹿児島かぎしやうの老舗デパートである山形屋の起源となっています。

III 明治維新と女性

薩摩の女性は、しっかり家庭を支える凛とした気風の人が多いと言われていました。武家の女性は、夫を支え、息子を一人前の武士に育てることにプライドを持っている女性が多かったといえます。

一方、農村の女性は、男性と同様の働き手として位置付けられており、男性が夫役(労働奉仕)等に動員されると、女性はその分の労働も負担しなければなりません。

明治維新後は、女子にも学校教育を行うべきとの考えが生まれ、中にはより高い教育を受けるために東京の学校へ進学し、社会貢献を目指す女性も現れました。



ポイント

- 武家の女性は教養が高く、子どもを厳しく躾け、教育した。
- 夫に代わって家や地域を支えた女性もいた。
- 農村の女性は働き手で、男性と同様の働き手とみなされていた。
- 女子教育の必要性は明治維新後に認識され、次第に充実していった。

1 武家の女性

Q 武家の女性は、明治維新にどのように関わっていたのでしょうか？

武家の女性には、婦道(武家の女性の規範となる教え)の実践として、夫を支え、家庭を守るとともに、子どもに手本を示しながら教育することが求められました。

母親は、男児が6歳になるまでは自らの手で徹底的に教育し、後は地域の青年による集団教育の郷中教育(→P.14)に委ねました。母親は男児を一人前の武士に育てるため、その躾は厳しく、息子はいつまでも母親を尊敬することになりました。

大久保利通の母 ふく子

大久保利通の母 ふく子は、口数が少なく控えめで、いつも落ち着いて行動する女性でした。息子の利通も、仕事をする時は常に冷静沉着でした。この利通の性格は、幼い時から母の影響を受けたためと言われています。

夫に代わり、種子島を治めた松寿院

9代藩主 島津斉宣の娘である隣姫(後に松寿院)は、生後3か月で種子島久道(5歳)と結婚し、21歳で長男、翌年に次男を出産しましたが、どちらも幼くして亡くなりました。文政12年(1829)に夫も死去し、その後14年間にわたり当主不在の種子島家を松寿院が支えました。

天保14年(1843)に島津本家の久珍(松寿院の実弟)を養子に迎え、種子島家の跡継ぎにしましたが、久珍も嘉永7年(1854)に死去し、その子久尚は生まれたばかりであったため、再び松寿院が種子島を治めることになりました。

松寿院は大浦塩田の開発、赤尾木港(現在の西之表港)の修築、大浦川の改修など、種子島の産業振興に力を注いだと言われています。

※ 種子島家は中世以来種子島を治めた領主。



松寿院(しょうじゅいん)(1797 - 1865)
【熊野神社(中種子町)蔵】

2 農村の女性

Q 農村の女性は、
どのように生きたのでしょうか？

農村では、女性も男性と同様の働き手とされました。家族の男手が夫役等に行くと、女性はその分の労働も負担しました。

農村の女性は、昼間は男性とともに畑仕事に精を出し、毎晩食事の後片付けや拭き掃除を済ませた後、明かりの燃料を節約するため、隣近所に交代で集まり、夜遅くまで木綿糸や麻糸を紡ぎました。農村の若い女性は、庄屋などの豊かな家へ働きに行く者も多く、勤め先では給料の代わりに着物をもらう衣裳奉公も行われました。



「琉球眞景(りゅうきょとうしんけい)」【名護博物館蔵】
刈り取った芭蕉の茎をテイル(竹籠)で運ぶ女性



味噌つき

味噌などの調味料は基本的に自家製で、味噌造りの日は親類や近所の主婦たちが集まって、世間話をしながら手杵で味噌を造りました。娯楽物の少ない農村では、味噌造りなどが娯楽でもありました。

奄美の女性と芭蕉布

奄美では、芭蕉布※が大量に織られ、島民の普段着のほかに、藩の買取や献上品、琉球との交易品となりました。

幕末の奄美の様子を記した『南島雑話』にも、島民が皆芭蕉布で作った服を着ていることや、女性が苦勞して芭蕉布を織っていたことなどが記されています。

※ 芭蕉の茎の繊維から芭蕉糸を紡ぎ、これを織った布。

3 女性の教育

Q 明治維新の前後では、女性の教育に
どのような変化が起きたのでしょうか？

江戸時代の女子教育

薩摩では、女子への教育はあまり行われなかったと言われますが、女子は礼儀作法のほか、神を敬う精神、感謝の念、豊かな感性、金銭感覚、勤勉などを、家事や裁縫を通して母や祖母から継げられました。

明治維新後の女子教育

明治7年(1874)の鹿児島県における女子の就学率は0.48%で、全国最下位でした。このことは小学校に入学する女子はほとんどいなかったことを示します。そうした状況下でも、より高い教育を受けるため東京の学校へ進学し、社会で役立つ人材になることを目指した女性もいました。

鹿児島女子教育が本格的に整備されるのは、明治10年の西南戦争後のことでした。

明治13年には、伊作村(現在の日置市吹上町伊作)の村長宇都為栄が伊作小学校附属裁縫学校を設立しました。これは、全国で最も早い時期にできた女子の初等職業学校でした。

東京女子師範学校に入学した 2人の才女

薩摩藩英国留学生(→P.13)として学び、後に初代文部大臣となる森有礼が、明治2年(1869)に鹿児島に作った英学塾には、古市静子という種子島出身の女子学生が入学しています。その後、古市は東京女子師範学校(現在のお茶の水女子大学)で学び、明治19年、東京に駒込幼稚園を創設し、日本の幼稚園教育の先駆けとなりました。

また、押川栄も明治9年に県から派遣されて東京女子師範学校に入学し、卒業後は千葉県の幼稚園の教師になりました。



IV 明治維新と子ども

薩摩藩は、時代が求める人材を認識し、成績優秀な者は藩外の学校へ派遣しました。薩英戦争後は、開成所を設置して西洋の技術や英語の教育を行い、さらにイギリスやアメリカに留学生を派遣しました。また、郷中教育は、心身や武芸の鍛錬をする自治的な集団教育で、薩摩藩の武士の気風を養成する基礎となりました。

江戸時代の庶民の子どもは、家の職業に関することを親や地域の先輩から学びました。

明治維新後は学校教育が始まり、西南戦争後に本格化しました。

ポイント

- 幕末期の薩摩藩では、海外に目を向けた人材育成が行われていた。
- 成績優秀者には江戸や長崎など藩外で学ぶ道も開けていた。
- 郷中教育の中で武士が学ぶべき学問や規範を教え込まれた。
- 明治維新後の学校教育は、西南戦争後に本格化した。



1 海外に目を向けた人材の育成

幕末期における薩摩藩の教育の大きな特徴は、海外に目を向けた人材育成をした点にあります。薩摩藩は、琉球などから海外の情報を得て、西洋の技術の優秀さを認識していたことから、海外へ留学生を派遣しました。

19人の英国留学生

慶応元年(1865)派遣の薩摩藩英国留学生は、使節団を含む19人にのぼり、その中には13歳の若者もいました。

英国留学生の長沢鼎は、アメリカに渡って実業家になり、後に「ワイン王」と呼ばれました。村橋久成はサッポロビールの基礎を築き、町田久成は現在の東京国立博物館を創設し、初代館長になりました。

また、翌年6人の米国留学生が派遣されました。米国留学生のうち、吉原重俊は日本銀行の初代総裁になり、仁礼景範は海軍大臣になりました。



前列右端:長沢鼎(ながさわかなえ)
前列中央:町田久成(まちだひさなり)



後列中央:村橋久成(むらしひさなり)
前列左端:森有礼(もりありのり)

薩摩藩英国留学生【鹿児島県立図書館蔵】

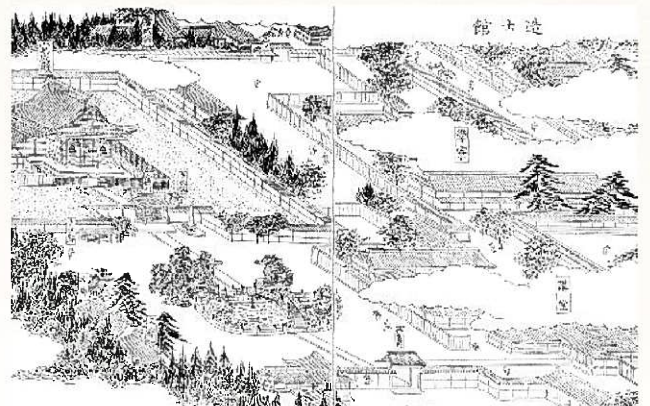
Q 明治維新で活躍した薩摩藩では、どのような教育が行われていたのでしょうか?

2 藩校での教育

薩摩藩の藩校 造士館は、安永2年(1773)に島津重豪が設置し、鹿児島城下の武士だけでなく、郷士も学ぶことができ、さらに庶民も別室で聴講することが許されていました。講義は儒学が中心で、岡山の閑谷学校、萩(山口)の明倫館などと並ぶ全国有数の藩校でした。

成績優秀な者は、幕府の学問所である昌平黉などで学ぶ道もありました。こうした教育システムにより、薩摩藩は儒学、国学、蘭学の各分野で優秀な人材を世に出しました。

また、薩摩藩は元治元年(1864)に西洋の技術や英語を学ぶ開成所を設置し、優秀な者から英国留学生を選抜しました。



造士館(そうしかん) 図『三国名勝図会(さんごくめいしょうずえ)』(青潮社)
(現在の鹿児島市中央公園付近)

3 郷中教育

郷中教育は、薩摩藩独特の青少年教育で、郷中(地区)ごとに武士の子どもが集まり、二才と呼ばれる年長者を中心に、集団の中できずもに学ぶ教育でした。特定の教場は無く、郷中の家を日替わりで学びの場としました。

郷中教育では、負けず嫌いの精神と連帯意識を持って心身と教養を磨き、また、詮議と呼ばれる問答なども行い、武士道を高め、行いを正し、公のために尽くす人材を育成しました。教育の中で行われた水泳や剣術などの稽古は、鍛錬であるとともに楽しみでもありました。

郷中教育では、文武の激しい修練だけでなく、薩摩琵琶を演奏したり、ユーモアを交えた会話をしたりして、豪壮かつ人間味のある人物となることを心がけていました。このようにして、義を重んじ、細かいことに拘らず行動する薩摩武士の気風は養成されていきました。

Q 明治維新の前後で、鹿児島県の教育はどのように変わったのでしょうか？

4 明治維新前の庶民の教育

江戸時代には、藩としての庶民への教育は行われず、藩内の寺子屋もわずかでした。庶民の子どもの多くは、一人前になるため家の職業に関する知識を親や地域の先輩から学びました。

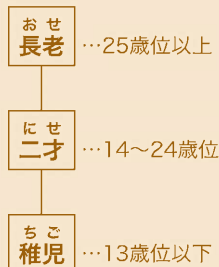
また、名頭(門の責任者)と呼ばれた百姓は、藩の下部組織である門の運営に際し、年貢や金銭の貸し借りを記録するため、読み書きや計算ができました。

農村には地域ごとに棒踊りなどの芸能があり、踊りの練習を通して青年に団体行動を身に付けさせるとともに、娯楽にもなりました。



棒踊りの様子

郷中の構成員



詮議の内容

詮議では、例えば「自分がおぼれた時、助けてくれたのは長年探していた親の敵だった。その時、お前はどうか？」と質問し、的確に判断する訓練を行うとともに、武士としての心構えを考えさせました。



忠義の心を高めた『赤城義臣伝』【黎明館蔵】

主君の仇(あだ)討ちをした赤穂(あこう)義士討ち入りの日である12月14日には、郷中ごとに『赤城義臣伝(せきじょうしんでん)』の輪読会をしました。

5 明治維新後の教育

明治期になると、徐々に小学校も設置され、社会の役に立つ人材になるとういう意欲を持つ若者が育っていきました。

鹿児島県では、西南戦争前の就学率は7.1%で全国最下位でしたが、戦後は「教育は国づくりの基本」という認識の下、厳しい財政状況の中でも教育の充実を図りました。特に2代県令 岩村通俊は教育に熱心だったので、小学校の整備が急速に進み、入学者も増えました。

中等教育機関については、明治11年(1878)に県立鹿児島中学と明治14年に公立鹿児島学校ができ、明治17年に両校が合併して鹿児島県立中学造士館(後に第七高等学校造士館を経て、現在の鹿児島大学)が設立されました。



「田上(たがみ)小学門札」(西郷隆盛直筆)【鹿児島市立田上小学校蔵】



中学造士館(そうしかん)本館【黎明館蔵】

鹿児島市の磯(いそ)地区にあった「異人館」を鹿児島城跡に移築し、中学造士館の本館として使用しました。

幕末維新の主な出来事

和暦(西暦)	鹿児島	日本	世界
文政12年(1829)	ずしよひろさと てんぼう 調所広郷による天保の改革(~48年)		
天保11年(1840)			(中)アヘン戦争(~42年)
嘉永4年(1851)	しまづなりあきら しゅうせいかん 島津斉彬が藩主となる,集成館事業開始		(中)太平天国の乱(~64年)
6年(1853)		ペリー来航	
安政元年(1854)	しょうへいまる 洋式帆船 昇平丸完成	にちべいわしんじょうやく 日米和親条約	
5年(1858)	しまづひさみつ ただよし 斉彬急死,弟 島津久光の子 忠義が藩主となる	にちべいしゅうこうつうしやうじやうやく あんせい たいごく 日米修好通商条約,安政の大獄(~59年)	(インド)ムガル帝国滅亡
万延元年(1860)		さくらだもんがい い い なおすけ 桜田門外の変で井伊直弼暗殺	
文久2年(1862)	てらだや なまむぎ 久光が率兵上京,寺田屋事件,生麦事件	こうめい かぎのみや とくがわいふもち 孝明天皇の妹 和宮が徳川家茂と婚礼	(英)ロンドン万国博覧会
3年(1863)	さつえい 薩英戦争で集成館など焼失	はつげふじつ 八月十八日の政変で京都から長州を追放	(米)奴隷解放宣言
元治元年(1864)	かいせいじょ 開成所設置	きんもん ちやうしやうせいぼつ 禁門の変,第一次長州征伐	
慶応元年(1865)	集成館機械工場完成,薩摩藩英国留学生派遣		(米)リンカーン大統領暗殺
2年(1866)	さつちやうどうめい 薩長同盟締結,薩摩藩米国留学生派遣	だいにしやうしやう 第二次長州征伐	
3年(1867)	ぱりばんこく パリ万国博覧会出展,鹿児島紡績所設置	たいせいほうかん おうせいふつこ たいごうれい 大政奉還,王政復古の号令	(仏)第2回パリ万国博覧会
明治元年(1868)	ぼしん 戊辰戦争(~69年)	ごかしやう ごせいもん 五箇条の御誓文,明治改元	
2年(1869)	藩政改革	せん とほんせいほうかん 東京遷都,版籍奉還	(エジプト)スエズ運河開通
3年(1870)	鹿児島医学学校兼病院設置		
4年(1871)	さいごうたかもり ごしんべい 西郷隆盛が藩兵を率い上京(御親兵)	はいほんちけん いわくらしせつだん 廃藩置県,岩倉使節団が出発(~73年)	(独)ドイツ帝国成立
6年(1873)	げや おおくぼとしみち ないむきやう 西郷隆盛下野,大久保利通が内務卿に就任	めいじろくに 明治六年の政変	
7年(1874)	しがっこう 西郷隆盛が私学校を設立	さが たいわんしゅつべい 佐賀の乱,台湾出兵	
10年(1877)	しんなん じじん 西南戦争,西郷隆盛自刃		(露)露土戦争(~78年)
11年(1878)	大久保利通暗殺		
18年(1885)		ないかくせいど 内閣制度が発足	
22年(1889)	鹿児島市制実施	だいにほんていこくけんぽうほつぷ 大日本帝国憲法発布	

〔県内にある明治維新関係の主な博物館等〕

- 鹿児島県歴史資料センター黎明館(鹿児島市城山町7-2 ☎099-222-5100)
- 尚古集成館(鹿児島市吉野町9698-1 ☎099-247-1511)
- 鹿児島市立西郷南洲顕彰館(鹿児島市上竜尾町2-1 ☎099-247-1100)
- 鹿児島市維新ふるさと館(鹿児島市加治屋町23-1 ☎099-239-7700)
- 薩摩藩英国留学生記念館(いちき串木野市羽島4930 ☎0996-35-1865)

事務局(執筆・編集)

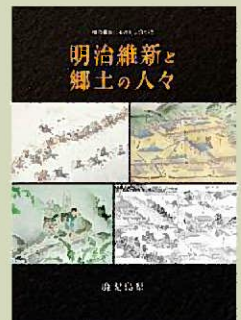
吉満 庄司 鹿児島県知事公室政策調整課 専門員
新福 大健 鹿児島県知事公室政策調整課 専門員

編集に当たっては、下記の先生方からご意見をいただきました。

田宮 弘宣 鹿児島県教育委員会義務教育課義務教育係 主任指導主事
大重 満明 鹿児島県総合教育センター教科教育研修課 義務教育研修係長
塩満 貞徳 鹿児島市教育委員会学校教育課 指導主事
阪本 晃年 鹿児島市立吉田南中学校 教諭
福永 和也 鹿児島市立緑丘中学校 教諭
古田 勇樹 鹿児島市立西紫原中学校 教諭

さらに詳しく知るには……

本誌は、明治維新150周年記念事業『明治維新と郷土の人々』の概要を分かりやすくまとめたものです。さらに詳しく知るには、鹿児島県のホームページから『明治維新と郷土の人々』をご覧ください。



明治維新と郷土の人々

検索

鹿児島県知事公室政策調整課

〒890-8577 鹿児島市鴨池新町10番1号
TEL:099-286-2547 FAX:099-286-5590

平成28年3月 印刷: 洲上印刷株式会社